

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2018年11月5日発行 No.86

『彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。』

(マルコ 12:28~31)

<喜びに満ちた「おめでとう」と「おかえりなさい」!! 大盛況の神国祭&ホ-ムミ-ングデ-!!>

今年度創立50周年という記念すべき時を迎えている KIU。9月末に大きな記念式典を行いました。先週末にも神国祭と同時にホームカミングデーを行いました。ここぞとばかりに盛り上がる学生に加えて 200 名を超える参加者でキャンパス内も祝賀会会場も大盛り上がり!! 集うみんなで共に喜びを分かち合いました!!



天気もサイコー!! 神国祭日和!!



交代を告げられる前田理事長



50年の感謝を込めて乾杯



次代のビジョンを語る下村学長



I初キ-に満ちた学生のパフォーマンス



心からの「ありがとう」を込めて



会場を盛り上げた JAZZ 演奏

存在感が光った留学生の歌

閉会祈禱を奉げる八代新理事長

<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

10月29日(月) テーマ:「見えない繋がりを覚えながら」 野間 光顕(チャプレン)

先週金曜日の午後、垂水の学院記念チャペルで「学院関係者逝去記念式」が行われた。ここではこれまでに逝去された全ての教職員・学院関係者 105 名の名前が一人ひとり丁寧に読み上げられ感謝と魂の平安が祈られた。私は、自分の属するこの八代学院が、集う命(今生きる人は当然、逝去され目に見えない人の魂も)大切に覚えながら 50 年以上の歩み続ける事の一つのプライドのようなものを感じた。時代の変化の中でも揺らぐ事なく、人間が本当に大事にしなければいけないものをしっかりと見つめ続ける…。そのような歩みを大切にしたい。

10月30日(火) ※この日は恒例の音楽礼拝!! オルガニストの伊藤

純子先生の素敵な演奏に耳と心を傾けました。

今回は、11月20日(火) です!!

10月31日(水) テーマ:「無知の知 そこから学ぶ」 武政 誠一(リベリテ-ヨソ学部)

辞書によると「無知の知」とは、「己の無知を自覚する事が真の認識に至る道」とするソクラテスの提唱した真理探究への基本姿勢である。また 20 世紀最大の物理学者アインシュタインは「学べば学ぶ程、自分がどれだけ無知であるかを思い知らされ、自分の無知に気づけば気づく程、より一層学びたくなる」という言葉を残している。学ぶ方法は、学校に通うだけでなく、読書や人との出会い等、様々な形がある。私も長年人間の体に向き合い続けているが、学びを深めれば深める程、知らない領域の存在を自覚するようになる。知っている範囲の外側にはまだまだ知らない事が無限にある。だから素直に自分の無知を認め、謙虚に学ぶ姿勢を大事にしたい。

11月1日(木) テーマ:「ハロウィンの夜」

遠藤 雅己(経済学部)

ハロウィンが注目を集めているが、この起源はアイルランド、ケルト地方の自然発生的な祭りにあると言われる。元々は日本のお盆のような、死者の霊を覚えてこの世に迎える意味合いが強かったが、18~19世紀にアイルランドからアメリカに移住した人たちによって今のよう形が広がった。キリスト教は死が終わりではなく、魂の復活を信じる宗教である。キリスト教を支えた先人の霊を奉る諸聖徒日(11月1日)の前日(諸魂日)の夜、信徒が墓前で食事をする風習とハロウィンが重なった。人は死が怖く、諸魂日に魂がこの世に戻る事と、ハロウィンが重なりキリスト教の中に広がった。この時、一人ひとりの魂を覚える時としたい。

11月2日(金) テーマ:「原爆の子の像からのメッセージ」 青山ひかる(経済学部1年)

広島平和記念公園の中に佐々木禎子さんが折り鶴を掲げる「原爆の子の像」という慰霊碑がある。私は禎子さんと同じ幟町小学校に通っていたため、毎年何度も平和集会に参加した。被爆者の話に耳を傾け、平和記念式典に参加し、8時15分に黙禱した後には、平和の願いを込めて「アオギリの歌」や「折鶴のとび日」を全校合唱した。今年の春に入学した KIU では『ヒロシマ平和旅考』を行っており、もう一度平和について学びたいと思い参加した。実際に参加すると、初めて聞く事も多く、とても新鮮だった。最も印象に残ったのはやはり「原爆の子の像」だった。

戦争は何の罪もない子供たちの命を巻き込んでしまう恐ろしさを持つ。73年前、かけがえのない多くの命を奪った戦争の力が、もうこれ以上の悲しみを生み出さぬよう、私たちも禎子さんの苦しみをしっかりと覚える事が求められているように思う。次年度の平和



旅考に一人でも多くの学生が集う事を願う。(文責：野間 光顕)